

## 23. 際（きわ）、縁（へり）と隠れの話

「際」という語を辞書で見ると、他との境界、ある状態になろうとしているとき、極限やはて、分際や身の程というような意味があります。モノをはじめとして、違うものとの境目というのが普遍的なようで、すべてのものにあるような気がします。例えば、地形でもどこまでも同じ地形が続くということはないわけで、どこかで違いが現われているものです。それは侵食で出来たものもあるし、隆起や沈降というような変動が関係しているかもしれませんし、断層などによる段差かもしれません。

活断層の典型では、断層崖というような連続性のある直線的なものが出現していることがあります。地質構成にしても、地層の生成される環境でさまざまな性質の異なるものが積み重なっているものがあります。そのような違いは大きな外力を受けると、当然ながらそれによる挙動が異なりますので、その性質によってさまざまな現象が発生して、大きく変化することになります。

ところで、日本列島も地球の大地という視点から見ると、ユーラシア大陸の東アジアの「縁」に位置しています。また、太平洋の縁辺部（縁）にあることで火山・地震列島といわれ、災害列島と称されることの大きな要因となっています。「縁」にあるということは、不安定な潜在的な要素があって、地震や火山噴火、豪雨といった外的な応力が加わるとすぐに反応してくるということです。

そういえば、自然災害は地形の変わり目（活断層、がけ）や地層境界（硬軟、地下水、ユレの増幅）で起きやすいし、土質（変化、陥没、沈下）や旧地形（河川跡、湿地、沼沢地）といった見えないものが活性化することで起きます。ものの違いはモノの性質が違うだけでなく挙動も異なるということになります。

それから、学際とか業際といった言葉がありますが、これは違ったものの中にある共有スペースのようなもので、最近は目にするものが多く、これまでのカテゴリーに収まらないものになってきています。わが国は地震・火山噴火・豪雨が多く、人口が限られたところに密集していることだけを取り上げても、自然災害による生活環境や命が脅かされる存在になっています。

それゆえに、防災を考えるときには、研究者でも行政、マスコミ、住民などから避難や土地利用となどへの提言が求められますし、防災にかかわる多くの人や機関も、本来有する領域を超えて連携をしていく必要があります。そうでないと、防災は事前から発生時、復旧から復興へと先が長いし、社会状況を含み包括的な視点からの対応が求められることとなりますので、積極的に自分の領域から手足を出して相互にコミュニケーションを図っていくということが望ましいのではないかと思います。そのためにも領域を超えて共通語を持って情報の共有が必要となるのかもしれません。